

# 令和元年度 都城市立木之川内小学校 学校運営協議会評価報告書

4段階評価 4：期待以上 3：ほぼ期待どおり 2：やや期待を下回る 1：改善を要す

本年度の重点目標 <1：学力の定着と向上 2：思いやりの心の育成 3：体力の向上 4：地域とともにある学校づくりの推進>

評価項目	評価指標	学校の自己評価コメント	自己評価			学校関係者評価コメント	評価
			児童	保護者	教職員		
知	① 指導方法・指導体制の工夫改善によって学力が向上しているか。	① ○学力調査において、算数では4,5,6年生は県平均を上回っている。4年生、5年生はB問題で、県平均を上回っている。国語の読解力に課題は残るが、5,6年生とも昨年度よりも向上している。 ○「授業中に真剣に取り組んでいる」と回答した保護者は91%であり、「分かりやすく授業を行っている」と回答した保護者は84%だった。今後も指導方法等の工夫改善をさらに進め、学力の向上に努めていきたい。 ② ○「進んで本を読んでいる」と回答した教職員は75%で、保護者は58%、児童は63%と昨年度よりも伸びている。 ○学校の年間目標であった4500冊を達成しており、12月までに5300冊を超えている。このことから、読書推進は図られているといえる。	3.12	3.17	2.88	① ○木之川内小の児童は昔から自己表現が弱い。国語の読解力を伸ばすため音読をさせる方法を検討してはどうか。語彙が増加し、発表力がつく。 ○4～6年生の学力が向上し、特に5年生がB問題で県平均を上回っているという結果は、とても素晴らしい。日頃の先生方の細やかな指導のおかげだと思う。また、学習指導の中で、学年の実態に応じて、個々に合った読解力の育成を図る必要がある。 ○量より質が課題であり、進んで本を読むということも重要である。どのジャンルの本をどれくらい読んでいるか把握し、本の紹介をする等して、読解力向上につながるとうい。 ○読書の推進により、年間目標が達成され、推進の成果が表れている。本から学ぶことが多いので、国語の読解力につながるように家庭でも読んだ本のストーリーや感想を共有できるとよい。リニューアルした山田総合支所の図書館の活用も図るように呼び掛ける必要もある。	3.0
	② 読書活動の推進が図られているか。	③ ○「だれにでも思いやりをもってやさしくしている」と答えた児童は87%、保護者は98%が回答している。子どもたちに、思いやりの心が育ってきていると考えられる。職員も8割以上が育ってきていると考えており、人権教育や道徳教育の推進が効果を表しているものと考えられる。 ○「自分の住んでいる地域を自慢できる」児童は67%で、昨年度よりも着実に増えている。地域の方々とふれあい、活動を通して、地域のよさ、すばらしさについて気付き始めていると考えられる。	3.22	3.27	2.95	③ ○人として一番大切な、思いやりの心が育っていると感じる場面が多く見られた。学校では、優しさの体験を子どもたちに意識付けることが大切である。 ○毎朝の見守りの中で、こちらから「おはよう」と声をかけると返ってくるが、声がかさい。自分から積極的にあいさつができる子が少ない。 ○本校の児童は、心やさしい児童が多いと日頃から感じている。自分の住んでいる地域を自慢できる子どもを育てることは、私達も大きく役割を担っていることだと思うので、今後も積極的に協力していきたい。 ④ ○少人数だからできるファミリー活動を実施していることは、素晴らしい。ファミリー活動の回数を増やすとコミュニケーション能力を高め、先輩後輩の付き合い方等に役立つ。 ○木之川内小学校の地域ボランティアの考え方、取組は子どもたち、周りの大人にとってよい目標となっている。学校と地域が一つとなって、子どもたちを育てていくことで、コミュニケーション能力の向上につながる。	3.2
徳	④ 児童相互の絆を深めるとともに対人関係能力の育成が図られているか。	④ ○「だれに対してもあいさつを行う」と9割近い児童、保護者が回答している。コミュニケーション能力が高い児童も多いが、反面相手の気持ちを考えられず行動してしまう児童もいる。ファミリー活動の回数を増やす等、コミュニケーションを行う場を検討していく必要がある。					
体	⑤ 体力向上プランに沿って計画的・継続的に体力の向上が図られているか。	⑤ ○「進んで運動し、自分の体をきたえている」と約7割の保護者、児童が回答している。5月実施の体力テストでは、男子は平均以上だったのが48項目中24項目であり、目標には達しなかった。女子は48項目中27項目が平均以上で目標を達成することができている。 ○腰骨体操や柔軟体操の継続や、投力を高める運動の実施により、体力の向上を図っていききたい。	3.34	3.22	2.83	⑤ ○体力全般を向上させるには、自然豊かな地域のよさも生かし、多種多様な遊びで楽しく体力向上を図るとよい。また、家庭での遊びや手伝い等の取組も重要である。 ○野外での活動よりも、屋内のゲーム等でゴロゴロしている時間の方が長いような気がする。運動能力の向上には、日々の運動量だけではなく、家庭での食生活や生活リズムの見直しが必要である。 ⑥ ○子どもの実態を保護者が十分に把握して、山田ブロックで作成した「メディアガイドライン」を基準にPTAが中心となって啓発していくことが大切である。また、人数が少なくてもできる遊びを考えていくことも大切である ○登校渋りのある子は、生活習慣が身に付いていないことが原因の一つである。学校と協力して、手助けできることを模索し、全ての子どもが元気で学校生活を過ごしてほしい。	3.0
	⑥ 基本的な生活習慣の定着や心身ともに健康に生活する態度が育成されているか。	⑥ ○「早寝、早起き、朝ごはん」に心掛け、規則正しい生活を送っている。」と答えた保護者が76%、児童77%と、昨年度より向上した。今後も継続して、生活リズムの大切さを啓発していく必要がある。 ○「自宅でゲームをしたり、テレビを見る時間が決まっている」と答えた児童は60%、保護者は72%であった。家庭での約束を守ることにについて授業や小中一貫した取組・啓発をさらに進めていく必要がある。					
地域とともにある学校づくりの推進	⑦ 家庭や地域との連携による教育活動の充実が図られているか。	⑦ ○本年度から4月と9月に、地域学校協働本部の会を開き、年間計画の作成・役割分担及び本年度の重点課題「ふるさとを愛する子どもの育成」について協議を行った。地域コーディネーターを中心とした学校支援の体制が整い、昨年度に比べ、4倍増の取組を実施している。 ○ホームページのこまめな更新や学校便りの発行により「学校の教育方針や活動の様子等を分かりやすく伝えている」と回答した保護者は87%であった。学校と地域と一緒に取り組んでいること、他の学校、幼稚園との連携の取組を紹介し、家庭地域と連携・協働して、ふるさとに愛情と誇りをもった児童の育成に更に取り組んでいくようしたい。	3.29	3.17		⑦ ○地域コーディネーターを中心として、地域学校協働本部が活発な運営をされていて素晴らしい。しかし、学校支援ボランティアも今は限られた人たちがかりなので、もう少し仲間を増やして世代間交流をして、地域の活性化を図りたい。子どもたちの心に「ふるさとを愛する心」を育ててほしい。 ○保幼小連携することで、子どもたちの現状、学校としての取組、先生方の努力等を知るいい機会となっている。地域コーディネーターの方などから、専門的な話を聞き、勉強していきたい。	3.4